■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

24　山竹伸二「空虚な承認ゲーム」

●参考　見田宗介『現代社会の理論』【361/M17/1】（北野高校図書館）
大澤真幸『不可能性の時代』【361/O12/1】（北野高校図書館）

■目標　自分の実感を参照しつつ読む。

■追跡

①　見田宗介によれば、日本において社会共通の価値観が壊れはじめたのは一九七〇年代以降であり、以後、「虚構の時代」と呼ぶのがふさわしいような新しい時代に突入する。それは「関係の、最も基底の部分自体が、『わざわざするもの』、演技として、虚構として感覚される」時代である、と見田は言う。たとえば親子や夫婦といった関係も、親として、子として、夫として、妻として、各々が自分の役割を演技として感じている、どこか現実ではない虚構として感覚されている。

「虚構の時代」は、高度経済成長以後、ということになる。戦中戦後でイデオロギーの表面上の内容は大きく変わったように見えるが、「総力戦」という一点では、変わりはなかった。ところが、七〇年代を境に、人間関係の、もっと深いところが変質していく。「関係を演じる時代」。これはやがて、「キャラを演じる」といったことばで、生きていくための当然の戦略のようにみなされていく。

②　東浩紀はこうした「虚構の時代」について、「大きな物語がフェイクとしてしか機能しない時代」だと指摘している。

fake＝にせもの。「大きな物語」とは何だろう？　すでに他の文章に出てきてはいるが。

③　「大きな物語」とは宗教やイデオロギーなど、個人が生きる意味を見出だすための社会共通の価値観であり、たとえばキリスト教が強い影響力を持つ社会では、神への信仰を示す行為や生き方こそ、その人の生の意味を決定するし、共産主義の国家では、国家に忠誠を示す行為こそが賞賛され、その価値を認められるだろう。

ここは、おさらい、ね。「近代の理想」というのも、大きな物語だ。ここでいっている共産主義は、「物語」というより、スターリニズムに染まった、現実の共産主義のことやね。マルクス主義という意味の「大きな物語」は、労働者（プロレタリアート）の独裁により、資本主義の矛盾が止揚された理想の社会が生まれる、という「物語」だよ。

④　しかし、こうした「大きな物語」が信用を失い、社会共通の価値観がゆらいだとき、私たちは何をすれば社会に認められるのか、そして生きる意味を見いだすことができるのか、その規準を見失ってしまう。そのため、「大きな物語」のフェイク（偽物）を無自覚のうちに捏造し、それを信じようとすることで、かろうじて生きる意味を見いだそうとする。家族が各々の役割を演じるのも、一方では家族の理想像を見失っているにもかかわらず、幸せな家族の像をあえて信じようとしなければ、自分の居場所を見いだせないからなのだ。

論理を整理しておこう。

・私たちは、確かだと感じられる社会共通の価値観に照らして、自分が生きる意味を見いだす。
・社会共通の価値観（物語）が崩壊すると、自分が生きる意味を見いだしにくくなる。
・そのままでは生きられないので、無意識ににせものの物語を作り出し、信じようとする。
・理想の家族の物語を作り出し、信じる（演じる）ことで、自分の生きる場所を確保する。

⑤　このように、信じるべき価値を持たないからこそ、形式だけでも信じるふりをしてしまう精神、これをスラヴォイ・ジジェクはシニシズムと呼んでいる。

シニシズム【cynicism】の一般的な意味は、「社会風習や既存の価値・理念などに対して、懐疑的で冷笑するような態度をとる傾向」。

「信じてるふりをしてるだけさ」というわけだ。しかし、「無自覚にねつ造し」とあったように、ここでいわれていることは、自覚的にわざとやっているわけではないのかもしれない。

⑥　たとえばナチズムやスターリニズムといった二〇世紀のイデオロギー崇拝の根底にあるのは、こうした意味でのシニシズムであるという。民衆はそれを本気で信じていたわけではなく、ただ形式的に信じるふりをしていたにすぎない。「ふりをしていた」と言っても、自覚的に演技していたわけではない。自分がそうした思想を信じていることに対して、意識の上で疑念はないのだが、しかし心のどこかで疑っているため、自分の態度にどこか「わざとらしさ」を感じてしまうのだ。

やはりそうだ。「無自覚に」演じる。ここがポイントのようだ。やっていながら、どこかで、ぎくしゃくしたものを感じる。どうしてだろう？　ある種の違和感が人々を包む。

⑦　「シニカルな主体は、イデオロギーの仮面と社会的現実との間の距離をちゃんと知っているが、それにもかかわらず仮面に執着する」。ジジェクによれば、これは「王様は裸

だ」と知っていながら知らないふりをしていた、あの寓話における民衆たちと同じなのである。

この感じ、わかるだろうか。

努力し、偏差値の高い大学へ入り、高学歴の道を進めば、より幸福な人生が訪れる、という物語があったとしよう。現実には、大学、大学院と学歴が高くなるにつれ、経済的に苦しくなったり、就職の機会が減っていったりする実態がある。しかし、今、もはや自分には勉強するしかないとなれば、それにこだわるしかないではないか。

⑧　しかし、こうしたシニシズムの時代は終わりに近づいている、と東浩紀は主張する。もはや意味への渇望を人間関係のなかで満たすことはできず、他者の承認を求めることもなく、自分だけで欲求を満たすしか道はない。そして東浩紀はこのような変化を「動物化」と呼んでいる。

「人間」は他者（あるいは親・先生・社会）の承認によってその生を支えられる。この欲求は根深い。自分と他者を比較したくなる欲求とも結びついている。しかし、それが無効だとすると、人間をやめて「動物」となるしかない。恋をして、受け入れられて、思いを遂げる、というのが「リア充」だとすれば、「リア充」の断念は、二次元とか、妄想とか、他者のいない世界での快感充足の道に私たちを導く。

⑨　だが、はたしてそうだろうか。確かに人間は他者の承認ばかりを求めているわけではないし、単独で欲求を満たす可能性もあるかもしれない。「他者の承認など必要ない」と主張する人間も、決して少ないわけではない。しかしそれでも、他者の承認は自分の存在価値に関わる、最も人間的な欲望であり、長期にわたってそれなしに生きていける人間はほとんどいないだろう。

筆者の意見として、チェックしておくべし。☆**「しかし」のあとに主張が出てくる。**

それでも他者からの承認欲求は消えないぞ！　書き手はそう言っている。

⑩　確かに現代の日本社会では、社会共通の大きな価値観に対する信頼はゆらいでいる。だからといって、他者の承認を求めないような、自分一人で動物的に欲求を満たす人々が多数派を占めているわけではない。大多数の人間は現在もなお、身近な人間関係や小集団のなかで承認を求めている。そのため、学校や職場、趣味の共同体など、自分が属する集団において共有された価値観を重視し、その価値観に準じた言動を心がけている。

自分一人で動物的に欲求を満たすヤツは、多くない。ふつうは、小さな集団内での承認を求めている。キャラを演じたりして。

⑪　小集団ごとに異なった価値観が信じられているとしても、集団内で共有された価値観は、集団に属する者として承認されるための参照枠として機能する。食品の研究所では新食品の開発が、サッカーの部活動ではチームワークや高度なプレーが、「価値ある行為」と見なされ、仲間としての承認を高めてくれる規準となる。この点は社会共通の価値観が社会的承認の参照枠でもあるのと同じである。

小さな単位では、そこでの共通の価値観は機能しているという論だね。

⑫　しかし一方では、自分が属する小集団の価値観は、誰もが信じている価値観というわけではないこと、世の中には多様な価値観が存在することを、普通は誰もが知っている。そのため、自分が属する小集団の価値観への熱狂が冷め、関心が薄れると、その価値観に準じた行為に意味を見いだすことができなくなる。それでも仲間の承認だけは維持したいため、そうした行為の価値を無意味に感じる反面、それをやめることができない。

実感できるだろうか？　例を見よう。

⑬　たとえば営利目的の職場であれば、売り上げを伸ばせば評価され、承認を得ることはできるし、うまくいっている間はそれも楽しめる。だが一方では、そのような行為が職場以外ではさして評価されないことを知っているため、仕事がうまくいかなくなれば、ただ営業成績を競う日々の生活に価値を見出だすことができなくなる。しかし周囲の批判を怖れ、彼らの承認を維持するために、そうした行為をやめることができないのだ。まして、学校の同級生や幼稚園のママ友のような仲間関係においては、目的や価値観を共有して集まったわけではないため、より一層、承認を維持することだけが目的になりやすい。

承認してもらうことが自己目的になる。あるでしょ？　ピアノを弾くことには、もう意味を感じていないんだけれど、ピアノを弾く私、を認めてもらうためだけに弾く。ＵＳＪに行くことには、もう価値を感じないんだけれど、ミキたちとさあ、はぐれちゃうとさあ、居場所ないじゃん？　だから行くよって感じかな。ああつらいつらい――。

⑭　承認を維持するための形式化された空虚な行為という意味では、これは先に述べたシニシズムと同じだが、異なっている点は、もはや虚構としても社会共通の価値観は措定されず、そうした価値観を信じようとする自己欺瞞的な意識も存在しない、ということだろう。

⑮　それが「**読解問題１空虚な承認ゲーム**」なのである。

読解問題１「空虚な承認ゲーム」について、「シニシズム」と比較して説明せよ。

この段落をまとめればできちゃうみたいだが、それでいいのか。とりあえず作ってみよう。

△解答例（そのまんま）「承認を維持するための形式化された空虚な行為という意味では、シニシズムと同じだが、空虚な承認ゲームは、もはや虚構としても社会共通の価値観は措定されず、そうした価値観を信じようとする自己欺瞞的な意識も存在しない、ということ。」

何か、わかってない感が満載の答案――。

どこが一番ダメか。

空虚な承認ゲームとは？と聞かれているのに、その内容がない、という点だ、このままだと、「空虚な承認ゲームとは、自己欺瞞的な意識が存在しないこと。」という形になってしまう。ダメじゃん。

空虚な承認ゲームって何？　もう一度そう問おう。端的に言うなら、「承認してもらうための空疎なゲーム」。「空疎な」って？　「集団の価値に合わせた行為を無意味に感じるのにやってる」っていうことだね。

△解答例（空虚な…を定義）「空虚な承認ゲームとは、その集団の価値観に必ずしも意味を感じているわけではないけれど、集団の中での自分の場所をみんなに承認してもらうことを目的として、集団にとって価値ある行為をすること。」

さらに問いは、シニシズムと比較せよ、といっている。シニシズムを定義しないと。

シニシズム＝社会の価値観を本気で信じていたわけではなく、無自覚に、ただ形式的に信じるふりをすること。

このときにいわれている「社会の価値観」は、ナチズムやスターリニズムという例が使われているように、社会全体を覆う価値観のことだ。しかし、空虚な承認ゲームは、もはや虚構としても社会共通の価値観などなくなってしまった段階での話である。

解答例「シニシズムとは、社会共通の価値観を本気で信じることなく、無自覚に、ただ形式的に信じるふりをすることだった。一方、空虚な承認ゲームとは、もはや社会共通の価値観がなくなり、信じるふりをすることもなくなった段階で、小さな集団に自分の居場所を承認してもらうことだけを目的とするようになること。」

⑯「空虚な承認ゲーム」においては、自分の思うままに行動したい、感じたままに発言したい、という思いは、「本音を出したら嫌われるかもしれない」という不安によって、ある程度まで我慢せざるを得なくなる。そもそも愛情や信頼を感じている相手でない限り、過度の配慮や同調は負担なだけであり、自分の自然な感情を抑圧することで、自己不全感

を招いてしまうだろう。

友達関係の中で、多少ともあるヤツやね。実感読み、してください。

⑰　**読解問題２**それは「承認」を過度に優先し、「自由」を必要以上に抑圧した結果とも言える。

読解問題２「それ」とはどのようなことか。

「自己不全感」です。以上。――そんなわけないか。どのように「自己不全感」に至るか、足せばいいだけ。書いてあるしね。

解答例１「空虚な承認ゲームにおいて、自分の思うままに行動したい、感じたままに発言したい、という思いを、「本音を出したら嫌われるかもしれない」という不安によって、ある程度まで我慢せざるを得なくなることによって生じる自己不全感。」

解答例２「思うままに行動したいという自然な感情を、嫌われるかもしれないという不安が抑圧することによって生じる、自分がのびのびとしていない感じ。」

⑱　もともと「自由への欲望」と「承認への欲望」の間には葛藤が起きやすい。たとえば、職場で自分のやりたい仕事があっても、上司や同僚に気を遣って断念したり、休日は寝ていたいと思っても、恋人の買い物や友人の遊びに付き合ったり、私たちは他者の承認を維持するために（「承認への欲望」を満たすために）、ある程度まで自由な行動を抑制する。

あ、そういうことね。他者、が絡むからね。

⑲　一般的に、承認に対する不安が強い人間ほど、他者に承認されるための過剰な努力、不必要なまでの配慮と自己抑制によって、自由を犠牲にしてしまいやすい。自分の自然な感情や考え（本当の自分）を抑圧し、「偽りの自分」を無理に演じてしまうのだ。その結果、心身ともに疲弊してうつ病になったり、心身症や神経症を患ってしまうケースも少なくない。

書き手は心理学者だからね。これも実感読みしておこう。親に認められるためにいい子を演じるとかいうヤツだろうか。不安が強い人間とそうでない人間、がそもそもいるのだろうか。それとも、不安の時代だから、心身共に疲弊する人が続出しているのだろうか。――いろいろ考えながら。

⑳　すでに述べたように、社会共通の価値観（＝大きな物語）への信頼が失墜したため、何をしたら承認されるのかがわかりにくくなり、結果として承認不安が強くなっている。だが、「**読解問題３自由と承認の葛藤**」という観点からもう一歩踏み込んで考えると、そこには「自由な社会の到来」という、より大きな時代背景が見えてくる。

承認、というのは、たとえば「自己実現」といったなじみのことばで置き換えて理解してもよいだろう。自己実現とは、じつは、社会からの要求と、自分の要求が合致する形で成し遂げられる。自分を知り、社会を知り、目標（志）を立て、そこに向かって試行錯誤しつつ、自己形成、自己実現を目指す。これが、近代的（いや、古くからの）進路イメージだ。

たとえば、受験勉強などはこの古典的（？）な進路イメージに沿っている。合格最低点を超えることを目指し、知識を蓄え、不足を補い、進んでいく。自分の現在地点を測定し、すべきことを判断し、修正補足していく。目標をふらふら変えられると、その戦略が立てられなくなるから、選抜試験はみだり変更してはならない、という不文律がある。こうして、各大学の出題形式とか傾向というものが定まっていく。受ける者は、こうしたら受かる、という見通しを立てられる。ダメだったときも、勉強不足だったのだ、と納得できる。

しかし、たとえば、社会が変わったから、入試改革だ、問題も変えるぞ、といわれたら、受験生は不安になるでしょう？　「これを覚えなさい」ならハッキリしているが、「創造性を問う」「コミュニケーション力が大事だ」「主体的で対話的かどうかだな」とか、わけのわからないことを言われたら、「どうすれば私を〈承認〉してくれるんですか？」と叫びたくなる。

「就活」では、この「承認不安」はもっと大きくなる。就職氷河期には、いくつ受けても、どう演じても、受からない就活生がだんだん心理的に追い込まれていった。――映画にもなった**朝井リョウの『何者』**を読むがいい。

「就職活動の情報交換のために集まった、５人の２２歳。企業に入れば特別な「何者」かになれるのか、そして自分は「何者」になりたいのか。それぞれが疑問を抱えながら、就活に立ち向かっていた――。」

・近代以前の西欧社会ではキリスト教の価値観が強い影響力を持っていたので、その価値観に反する行動はほとんど不可能であり、個人の自由は存在しなかった。ところが一八世紀以降、市民革命と資本主義の発展にともなって、個人が自由に生きる条件も次第に整いはじめた。といっても、「人間は生まれながらにして自由であるが、しかしいたるところで鉄鎖につながれている」というルソーの言葉が示すように、最初はまだ伝統的価値観の影響力が強く、自由な行動には数多くの制約があった。伝統的価値観に反する行動は社会的承認が得られず、周囲の信用を失ってしまう危険性が高かったのだ。

読解問題３「自由と承認の葛藤」はどのようなことによって生み出されたのか。

「市民革命と資本主義の発展」。以上。――というわけはないか。でも、そうじゃん。まあ、その過程をもう一度整理してね、という問いだと受け取ろう。自由バンザイとはいかなかった、というその事情を書く。

・一八世紀以降、市民革命と資本主義の発展にともなって、個人が自由に生きる条件も次第に整いはじめた。

・しかし、最初はまだ伝統的価値観の影響力が強く、自由な行動には数多くの制約があった。

解答例（本文の語句をつないで）「一八世紀以降、市民革命と資本主義の発展にともなって、個人が自由に生きる条件も次第に整いはじめたが、しかし、最初はまだ伝統的価値観の影響力が強く、伝統的価値観に反する自由な行動は社会的承認が得られなかったため、自由に行動したいという思いと社会から承認してもらうことの間に葛藤が生まれた。」

解答例（短く）「市民革命と資本主義の発展に伴い、個人が自由に生きる条件が整い始めたが、一方、伝統的価値観に反して自由に行動することは認められなかったため、個人の自由な行動と社会からの承認との間に葛藤が生まれた。」

・ここに「自由と承認の葛藤」が生み出されたのであり、それはまず「個人と社会の葛藤」として現われ、「個人は社会に抑圧されている」といった世界像を生み出した。自由に生きる条件は確実に増大していたが、しかし自由への欲望が高まったことで、むしろ「社会によって自由が抑圧されている」と感じられやすくなったのである。

個人は「自由に行動したい」と思う。しかし、その思いが強さに、社会の自由に生きる条件の拡大が追いつかない。自由に学校へ行きたい、と思っても、学校を作る環境が整わない、とか。日本の自由民権運動なども、旧来の価値観（藩閥政治という江戸時代的な価値観）と自由の衝突として現れたものだ。

・たとえば精神分析を創始したフロイトは、「個人と社会の葛藤」を軸に据えて神経症を説明している。彼はこの葛藤をもっぱら「性欲と道徳心の葛藤」として据えていたが、それは神経症が増加しつつあった当時（一九世紀末）、性的欲望の自由な発露を許さないような伝統的な道徳観が根強く残っていたからだ。伝統的な道徳観に反する行為は社会的承認の剥奪を意味している。そのため、この道徳観に反する性的欲望は抑圧され、神経症が発症する。個人の自由と社会の承認の葛藤は、神経症という心のねじれを生み出したので

ある。

ここは、一つの知識として覚えておくがよい。神経症（Neurose）は、時代の病いともいえる。フロイトは抑圧されたものの解放によって、病気を治療しようとした。

・現在では、（性に限らず）社会の抑圧がそれほど強いわけではなく、自由に生きることを妨げる足枷はほとんど存在しない。科学の進歩と産業の発展、二度の世界大戦、マルクス主義の退潮、そして消費社会の到来によって、先進資本主義諸国においては伝統的価値観の影響力が弱くなり、多くの人が特定の考え方に縛られず、自由に生きられるようになっている。

・しかしその一方で、誰もが認めるような行為の規準が見えにくくなり、**読解問題４**何をすれば他者に認めてもらえるのか、きわめて不透明な状況になったのも事実である。このため多くの人間は、自分の感情や思考を自由に表出すること、自由に行動することを抑制し、身近な人々の承認を維持するために、彼らに同調してしまいやすい。自由と承認の葛藤は、いまや「個人の自由」と「社会の承認」の葛藤ではなく、「個人の自由」と「身近な人間の承認」の葛藤になっている。

・いま、コミュニケーション能力が重要になり、「空虚な承認ゲーム」が蔓延しているのは、社会共通の価値観を基盤とした「社会の承認」が不確実なものとなり、コミュニケーションを介した「身近な人間の承認」の重要性が増しているからなのだ。

「コミュニケーション英語」とか科目名になるくらい、なんでも「コミュニケーション」と唱えられる理由もまた、時代の問題として捉えられるということだ。一方、「コミュ障」も一般語になっていく。

読解問題４「何をすれば他者に認めてもらえるのか、きわめて不透明な状況になった」という事実の結果、どのようなことが起こったか。

「「個人の自由」と「身近な人間の承認」の葛藤」が起きた。以上。――というわけはないか。でも、そうやんね。――なんでこのパターンが繰り返されるかというと、この問題を作った方の癖なのです。本文の重要箇所を基本的に抜き出せば、答えっぽくなるところばかりを問いにしているからです。こういう設問、あるよね。そこで、抜き出した答えだけ書く人もいますな。でも解答欄が白く余っている。ええんかなあ。ええわけないね。

「何したら認めてくれるん？」的状況と、「個人の自由対親や友達からの承認」を結びつけよ。それが問い。そのままでは結びつかないもんね。

実質的に本文全体をまとめる問いになっている。

かつての「伝統＝社会の承認　対　個人の自由」と比べつつ考えるといい。

「……不透明な状況になった結果、……という葛藤が生じた」といった形が想定される。

解答例「かつて「個人の自由」は社会と対立していたが、社会共通の規準がなくなり、身近な様々な他者の承認を求めなければならなくなった結果、個人は自由な行動を抑制し、他者に同調しなければならないという、「個人の自由」と「身近な人間の承認」の葛藤を生み出した。」

■**読解問題**

1　「空虚な承認ゲーム」について、「シニシズム」と比較して説明せよ。

2　「それ」とはどのようなことか。

3　「自由と承認の葛藤」はどのようなことによって生み出されたのか。

4　「何をすれば他者に認めてもらえるのか、きわめて不透明な状況になった」という事実の結果、どのようなことが起こったか。

■**発展問題**

本文が示す「他者からの承認ゲーム」の実例を取り上げ、こういうあり方について、どう考えるか、論じなさい。

●重要語「承認欲求」＝「認められたい」と思う気持ち。人間の欲求のうちの一つ。しかしこれはなかなかやっかいなものでもある。認められたい、と、人の目が気になる、はセットになっている。これがこじれると「山月記」の李徴になる。とはいえ、これがない人間もいない。

――とはいうものの、自分で自分の存在を端的に認める、ということは、じつはそんなに困難なことでもない。それをかき乱すのは、余計な世の中の声、他者の声、そして、それらを内面化してしまった自分の中の妄言だ。そんなものに必要以上に耳を貸さず、心臓の鼓動と呼吸する感じにだけ耳を傾ければ、自分はよみがえる。かんたんなことなんだけどな。